銀座を銀座させたる所以

-モノに宿る魂-

何十年かぶりに、朝の銀座を姉と歩く機会を持てた。友人達との正午の約束までの午前中の時間を東京観光と名を付けて、有楽町駅で青い電車を降りたはいいものの、日曜の銀座の大概の店舗が十一時始まりだということが異邦人達の頭には全くなかった。昼食前に訪れておきたい目当ての店は十時半開店だが、まだそれまでに小一時間も余裕がある。

無理にカフェで暇をつぶすより、まだまぶたの重い銀座の小路をデジタルゲームのように隅なく歩くのも悪くはない。

「あれ、こんなところにあるなんて。」

姉が、突然立ち止まった。

「ママがこの店大好きでねぇ。よく連れて来られたわ。」

それこそ半世紀ぶりの宝物を発掘したように、普段はスペインでリタイヤを愉しむ姉が嬉々とした声を上げた。

その店は古民芸品を扱う店で、画家としての父が最盛期には幾度も通ったであろう画廊の並ぶ通りにあるので、母は用の帰りに幼い姉を連れ、その店を覗いて帰るのを楽しみにしていたのに違いない。閉まったシャッターの隙間から、まだ薄弱な日の光だけをたよりにウィンドウ越しに見える品揃えは、たしかに実家に幾つもあったような品々である。

そんなモノたちも今回の家の売却に伴う家財処分で、たくさんの貰い手先にお嫁に行った。そういえば、食器棚のなかで最後まで売

れ残っていたぽってりとした半透明の釉薬のかかった青灰色の小鉢達は、どこの食卓で奉公しているのだろう。あの手編みの籠は、今どんな季節の花を活けているのだろう。

世界のどこかで創られて、その値と代替に買い取られ、いつかは買い主の生が尽きても、次の使い手の元で生き続けるしあわせなモノたち。

人間という唯一手先を使う生き物がモノを創り、にわかの創造主の真似をしてモノを活かし、用い、価値を与え、念を込めることで、何層にも釉薬をかけるように魂を与えるのではないだろうか。また、そんな魂のこもった表現こそを人は芸術と呼ぶのではないだろうか。

朝日に輝く柳並木や、宅配便の配達員が小走りに駆ける素顔の銀座を満喫しよう。このような贅沢はめったに出来ることではない。

だんだん日差しが強くなってくるうちに、開店前の清掃に勤しむ従業員が目立ってきた。小さな間口の和装小物の老舗。奇抜な建築を競うヨーロッパのブランドショップ。最高級の随品しか扱わない宝飾商。一等地の軒を連ねるそれらの店先の路上を小箒で掃き、ウィンドウのくもりを丁寧にクロスで拭き、真鍮の看板をぴかぴかに磨く人々は、無言の体で店の接待学を示している。

さて、これが同じ欧州のブランドでも、それが現地の本店であっても、出勤十五分前に毎日同様の勤めをするスタッフはいないだろう。あわよくば、雇われ清掃員が時給時間内でノルマをこなそうとする作業に遭遇するばかりである。そして私達がそれを見る機会があっても、この銀座の朝のような清々しい気分にさせることはなく、表向きの煌びやかな舞台とは打って変わった薄暗い楽屋裏や、人前

で着飾り必要以上に化粧を施した女の朝のすっぴんを見たように、なんだか後ろめたい気分にさせるのである。

今回、実家にあった家財を整理処分する作業は、西洋感覚で「破棄する」のとは幾分異なった。家に残されたものは単なる消耗品が大方ではあったのだが、父と母、またそれに関わった人々の想いを単なる物品とせず、象徴の対象として蔵した両親の想いを処分するには、些かの覚悟は必要だった。

「日本人は、モノに魂が乗り移るとするから。」

友人の一人は、人生の半分以上を海外で暮らす私に教えてくれたものだ。仏壇はさもありなん、まして布団までを供養する民族のモノに対する観念を再認識する機会であった。また普段からその観念でモノをイキモノ同様に接し、扱うからこそ、さらに念も宿っていくのだと解った。

今、ドイツに戻ってきて、それらの魂をモノと共に捨て去ってきたのではなく、時空を越えこの地に連れてきた感がありありとある。魂達が新しい場をまるで一連の観光客のように喜んでいる。この私を筆頭に、断ち、離れ、放つことで浄化し、自由になれたのかもしれない。

本物を本物たりとさせる理由はかならずある。目に見える以外の大切なモノを忘れてならない。

あの日々が、概念や一時の満足で流されない、永遠の珠玉のひとつぶを見極める目を養ってくれたような気がする。

二千十五年五月末日　　真美